すわみつえ通信

No.３３６　２０２４年１１月４日

日本共産党鴻巣市議会議員
諏訪　三津枝

連絡先　鴻巣市赤見台3-2-7
TEL：596-9440 FAX：507-4151
携帯：080-5039-2785
E-mail：mi-suwa@ezweb.ne.jp
mitsue-suwa@jcom.zaq.ne.jp

WEBで　すわみつえ

身近な議員として　もっと届けたい声がある　声をかたちに

行政視察研修の報告

９月議会終了後、各常任委員会は行政視察を行いました。すわみつえ市議は所属する文教福祉常任委員会と荒川北縁水防事務組合の視察研修参加しましたのでご報告いたします。

●10月23日（水）　大阪府大東市「家庭教育支援について」

大東市役所前

ブランドメッセージ　「子育て　大都市（ダイトシ）よりも大東市（ダイトウシ）」

「子育てするなら、大都市よりも大東市」をブランドメッセージに掲げる大東市の家庭教育支援は、都市化や核家族化などに伴う地域社会のつながりの希薄化の中、保護者を孤立させない取組が進んでいます。事業実施に関わるスクールソーシャルワーカー（SSW）は12名配置され、専門職の果たす役割も効果をあげる要因と思いました。

アウトリーチ型支援

「孤立の未然防止、地域とのつながりづくり、課題の早期発見」を目的に、小学1年生の児童がいる全家庭への訪問を行うアウトリーチ型支援を行い、さらに「保護者が気軽に話し合える」ことを目的にした「いくカフェ」があります。

サロン型支援

「いくカフェ」は参観などの学校行事や地域行事に参加する「地域いくカフェ」、不登校など悩みを抱えた保護者向け「市教委いくカフェ」、企業・団体が開催する「企業版いくカフェ」と目的や趣向が異なるサロン型支援を実施しています。

●10月24日（木）　三重県桑名市「地域包括ケアシステム構築に向けた取組について」

桑名市役所　議場

桑名市の「地域包括ケアシステム」は、できるだけ多くの市民が住み慣れた場所で生き生きと暮らし続けて人生の最期を迎えられるよう取組んでいます。自宅をはじめとする「住まい」を確保した上で、「医療」、「介護」、「予防」および「生活支援」を一体的に提供するための地域づくりを目指しています。「介護予防・日常生活支援総合事業」について学んできました。

短期集中型サービス

リハビリテーション専門職が関わる「くらしいきいき教室」（通所型）「いきいき訪問」（訪問型）など、医師の指示書を必要とせず、専門職の十分なケアマネジメント・モニタリングの下、生活の場の環境調整や機能向上のためサービス提供を実施しています。

健康・ケア教室

医療機関・介護事業所が、医療・介護・健康等の専門職や地域のボランティアと協働し、高齢者や家族が気軽に立ち寄り相談できるよう、登録事業者の事業所の空きスペースで開催します。必要であれば利用者の送迎も行っています。

【俳句コーナー】

人は生きてやがて赤児に秋の雲

水色

毎週朝 駅頭においてホットなニュース「すわみつえ通信」をお届けします。

（月）吹上駅南口　（火）北鴻巣駅東口　（水）北鴻巣駅西口　（木）吹上駅北口　（金）鴻巣駅西口

●10月25日（金） 愛知県長久手市「重層的支援体制整備事業について」

8050やダブルケアなど生活課題の複雑化・複合化や、従来型の互助の機能が弱体化するなかで地域で孤立することのないよう、自分らしいくらしの実現のため行政と地域が一体となり重層的支援体制を整える目的で行われています。小学校区ごとに行政職員の地域共生担当と長久手市社会福祉協議会の「ふくしなんでも相談員」であるコミニュニティソーシャルワーカー（CSW）が配置されています。

【N－ジョイ】 つながりづくりの場や、生きづらさや孤立感を感じている方の相談窓口として、2021年5月に福祉の家にて新たに開設された相談窓口兼居場所です。

長久手市役所 会議室

●11月1日（金） 荒川左岸堤防巡視視察

11月1日（金）荒川北縁水防組合議会定例会が大里行政センターで開催され、閉会後の荒川左岸堤防巡視視察に参加しました。1947年（昭和22年）のカスリーン台風被害後、荒川の堤防が造成されてきました。重要水防箇所を荒川上流河川事務所・熊谷出張所所長が説明をされました。

下段盛土により、鴻巣方面から高水敷におりる坂路がなくなってしまうため、上流側の坂路に転回場を整備（右の写真）

＜施工前＞

＜施工後＞

コラム「小社会」 ▸秋忘れ◂ 高知新聞

秋忘れ、秋収め、秋泊（どま）り・・・。辞書を引くと、秋と稲作が結びついた言葉がいくつもある。収穫作業に追われた日々を忘れ、家族たちとほっと一息つく。厳しい労働で得た、その年の実りへの感謝も言葉には込められている。

秋泊りは、稲刈りがすんだ農家の妻が骨休めに生家へ戻ることをいう。長野や秋田で使われたそうだ。そうした言葉は多くの地域にあっただろう。季節と人が、今よりもずっと身近だったころの暮らしを辞書は教えてくれる。

秋は、重大な時機を示す「とき」とも読む。与野党決戦の秋が終わり、自公は15年ぶりに過半数を割った。派閥裏金事件で選挙前から自民は防戦一方だった。加えて、投票の数日前に発覚した非公認候補側への2千万円問題がとどめを刺した。「あきれた。入れん方がかったかなと、もやもやしてる」。きのうの本紙（高知新聞）に、期日前投票で自民に投じた有権者の嘆き節が載っていた。「政治とカネ」を甘く見過ぎた大きなしっぺ返しが、この秋の結果だ。

選挙であまり注目されなかったが、食料安全保障も争点の一つだった。解決策となるのか、再生二期作という耕作法をテレビで知った。私たちになじみ深い二期作とは違い、刈り取った後の株から伸びた稲を育てて収穫する。温暖化で日本でも耕作地が広がる可能性がある。稲のように、この国の政治は再生するだろうか。本来の意味から外れるが、秋忘れは許さない。 【高知新聞 10月30日付】